

郷土資料館展示資料

(その2)

日露の関係を示す
露語の看板

ロシアの極東政策は、元禄10年(1697)以降、積極的に実施されたが、箱館(函館)とロシアの関りあいは、寛政4年(1792)ラックスマンが漂流者を連れて根室に入港、その翌年箱館に現われたのが初めてであり、これが外国船入港の最初といわれる。

幕末から明治となり、函館港はいよいよ貿易港としての頭角をあらわし、西洋人や華僑も多く住むようになった。函館区時代(明治32年～大正11年)の東浜町付近には棧橋、税関、銀行、それに伴って貿易、両替などさまざまな商店が軒を連ね、異人の往来も活発であった。看板の主、齊藤^{サツ}三郎は明治元年に士族福原角次の三男として下野国(栃木県)に生まれ、幼少で齊藤家の養子となる。ニコライが来日したことからロシアに関心を持ち神田のニコライ神学校にロシア語を学び、函館に渡る。

彼は明治32年、ウラジオストック港の有力な貿易商で、カムチャッカ地方に8か所の漁場を経営していたブリュネルと共同で、観陽丸など2隻を出漁させ、わずか半月で鮭900石を積み帰国した。そのことが一層函館人の北洋への意欲を刺激させ、奮起させたのである。彼が「日露漁業貿易」の看板を掲げたのは、おそらくこの時代であろう。

当時、沢克己、檜枝和七など大手の貿易商もあり、彼と



合わせて「対露貿易の三羽鳥」と称されたものである。

看板は3枚とも木製、黒漆塗り、彫刻文字の上に金粉を施したものであり、中には分銅型(両面用)に作られた、いわゆる姿看板がある。

江戸時代に流行しはじめた姿看板とは、字の読めない人にも解るものをと、商品そのものの形を、ズバリ看板に表わしたもので、このことは明治以降も行なわれていた。しかし日、英、露、3か国の文字を彫刻した看板は当時でも数は少なく、そのようなことから全国に現存するものは稀で、珍しい資料といえる。昭和53年富崎善雄氏より寄贈された。

市立函館博物館沿革史 (その11)

〈開拓使函館支庁仮博物館〉(4)

前回、英国の地震学者として名をなしたジョン・ミルンが、明治11年北千島の占守島まで開拓使の井深基八等属と同行し、いわゆる千島アイヌの動行を英文で発表し、併せて函館支庁仮博物館の考古学的資料を英文で欧米の学者に紹介したことを述べた。この記事はあくまでも彼自身の論文と、残された一枚の写真を基にしたもので、これについて開拓使の記録が何も無かったことを述べた。これは私の誤りであり、現在北海道の文書課に保存されている明治11年千島関係の簿冊の中に数点のミルン関係の書類のあることを知らされたので改めてこの記事を紹介する。

1) 外事係長岡三等属訳印

函館1878年8月2日

函館鎮台 時任為基貴下

明3日千島諸島江向航海之漁船有之趣傳承仕候、就而拙者同船乗船組罷越候都合には相成間敷哉、夫々用意之儀も有之若し難相成候はば北海道南部旅行之為朋友等とも相談之都合も有之候間其辺可然御取計上成下度懇願仕候、

ジョン・ミルン

以上が玄武丸が出発する前日提出したミルンの書面で即日乗船が許可され、これに対してミルンより時任為基に対しての礼状の写も残されている。この書面にある朋友とは、米国人のモース、あるいは英国人のトーマス・ブラキストン、英国領事ユースデン等を指すものと思われるが、私にはブラキストンの協力が一番強かったように思われる。モ



若き日の堀川トネ(明石信道氏提供)

ースは今年来日百年の盛大な記念展が行なわれ、彼の在日中の日(日本その日その日)も広く読まれており、ミルンの来函当時函館にきていたが、彼の日記にはブラキストンやミルンについて一行も書いていない。現在の説によれば開拓使時代、米国人と英国人とはあまり仲が良くなかったようであり、これは宗教の問題や開拓使の方針が米国一辺倒のような気もする。しかし函館は古くから外人が雑居しており、ブラキストンの力は絶大であり、開拓使支庁長時任為基も彼の依頼によってミルンの乗船を彼の一存で許可したのかもしれない。そのためか井深基が正式に提出した報告書にはミルン乗船の件には触れていない。しかし千島に同行した井深基はミルンの地質、地形等に対する研究方法等について深く関心を持ち、見取図の写の寄贈を求めた公書の写もあり、その謝礼として北海道千歳で製造した鹿の罐詰1ダースを贈りたいとの伺書もある。またミルンはブラキストンの世話で函館の東本願寺の娘堀川トネ(明治14年、ミルン31歳、トネ23歳)と結婚し、20年近い日本生活の後夫人を同伴して英国に帰った。

ミルンは東京大学の教授として活躍したが、明治16年2月14日(水曜日)日本アジア協会の例会で(東京築地の商業会議所)座長の駐日英国公使パークスに函館におけるブラキストンの鳥類の研究価値を説明し、ミルンが津軽海峡をもってブラキストンラインと命名した。

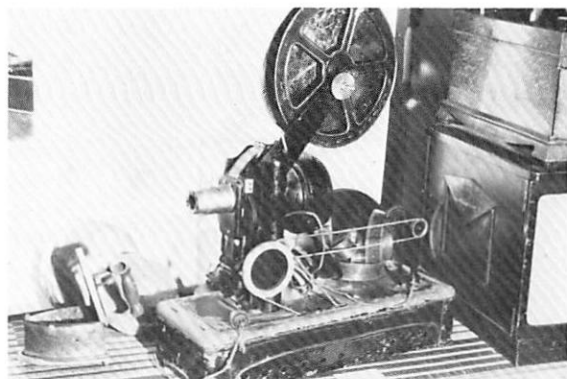
〈学芸係長 姫野英夫〉



鹿の罐詰

この写真は北大植物園内博物館に残された唯一のもの

はくぶつかん展示室



▲ 活動写真機

大正11～12年に海外旅行に出かけた医師菊池洲二氏がドイツで購入した「オブチカ」という携帯用活動写真で、1914年ごろからドイツで製作されていた。

〈菊池勝夫氏 昭和50年寄贈〉



▲ 山丹錦

中国の官服の古着で、江戸時代、米1俵(但し2斗入り)が蛙100本であったが、この山丹錦1枚30俵～40俵の価値があった。現在、北海道内にアイヌ使用のものが6点あり、函館博物館には内2点が所蔵されている。

〈杉浦嘉七氏 明治12年開館祝に寄贈〉



▲ 上野彦馬の写した写真

オランダから湿板写真の指導を受けた上野彦馬は、玉川三次・下岡蓮杖らとともに文久年間にはすでに江戸・横浜・長崎にそれぞれ写真場を開いていた。明治三年ころから本格的に日露漁業貿易で活躍した斎藤裕三郎氏(向かって右)が、北辺装備の姿で写っている。

〈富崎善雄氏 昭和五三年寄贈〉



▲ アリュート族の長頭巾

アリュート族がラッコ狩りをする時、狼や狐の皮で目や耳のついた頭巾をかぶり近づいて捕らえた。このように動物などの皮を着て狩猟するのは旧石器時代の名残といわれ、ロシア帝国が北千島へ進出するまで行なわれた。

〈黒田清隆採集 明治8年北千島に於いて〉



▲ 修道士の労働写真(部分)

「オラ・エト・ラボラ」(祈り且つ働け)、修道士たちは罪惡の多い世俗と離れて生活する。この写真は松吉政吉氏が渡島当別修道院で撮った記録写真の一枚である。全身雪と土と汗にまみれ樹木伐採の労働の苦行を擧げている。

〈松吉 実氏 昭和五三年寄贈〉

自然と文化財の見学会

—昭和53年度博物館市民講座から—

「割合函館に住んでいる人が、函館のことを知らないのでは…」「個人で行っても見せてもらえない文化財を見学するチャンスを…」「型にはまらない生の説明を聞きながら…」「楽しく体験を伴うものを…」という市民の要望や意見が聞かれた。確かに話や紹介文で聞いたり読んだりすることはあっても実物は見たことはない。毎日通りがけにある寺院にあることは知っているが、何か関係がなければ中に入って文化財を見学することができないということが往々ある。そういうことから今年は市民の声を念頭に入れて実地見学会を中心とした催しが企画された。

特に、松前町教育委員会文化財課長永田富智氏から詳しく説明していただいた「松前町郷土資料館見学会」、雨天ではあったが埋もれた文化財神山の石仏の見学会、大謀綱が引き揚げられる迫力と魚料理のおいしさに感激した「南茅部の漁業を訪ねて」、親子そろって散策した「夏の横津岳における植物観察会」、現在話題になっている旧渡島庁や函館区公会堂、ハリストス正教会、カトリック教会を見学した「函館の文化財史跡めぐり」など大好評であった。



「松前町郷土資料見学会」松前城にて

だが残念なことに企画した催しが雨で中止になったものも多く、参加希望が定員をオーバーし断らざるをえなかったこともあり、市民の方々に迷惑をかけたことが再三あった。

市民の自然・文化財に対する認識が深まっている状況から、要望があれば博物館としてできる範囲内で、今後共企画してゆかなければならないと考えている。

〈学芸員 岡田一彦〉

昭和53年度実施の 科学教室について

昭和32年の開催以来、22年目を迎えた博物館主催の科学教室は昭和53年度も天体、植物、昆虫の各分野を合わせて10回計画し、雨のため中止となった「函館山植物野外観察会」をのぞいて9回実施された。

天体の分野では四季の星座、プラネタリウム、七夕、中秋の名月観測会など6回が催された。博物館五稜郭分館二階の「科学教室」に集まった児童たちは講師の津川軍次郎先生の説明を聞いた後、屋外に出て天体望遠鏡をのぞきながら活発な質問をし、ときには同伴の父兄もそれに加わることもある。この五稜郭公園は市街地としては照明が少ないため比較的星がよく見える。また津川先生は科学教室の創設より御協力いただいている方であり、海外旅行の際のエピソードを含めたそのお話は毎回児童たちに好評である。

植物の分野においては五稜郭公園と函館山の野外観察会を計画したが、前述のように、五稜郭公園のみが実施された。「科学教室」で草花の構造などの説明を講師の宗像和彦先生から受けた後、公園内の植物の観察に移る。児童たちは、手にする草花についての呼名、その由来、構造などを先生から聞くために、並んで待つほどであった。

昆虫の分野は合わせて二回の野外観察会が近郊の仁山と赤井川で行なわれた。現地に到着してから、函館昆虫同好会の中嶋康二先生はじめ会員の方々の指導のもとに、児童たちは採集そして観察にと移った。児童たちには昼食をはさんでの4時間ほどが非常に短く感じられるようである。この観察会のしめくりとして、10月28日に全国的にも珍しい「昆虫感謝祭」が五稜郭分館の横にある「むしづか」の前で行なわれた。この催しは研究のため夏の間に採集した昆虫に感謝し、その霊を慰めるために行なわれるものである。

このように科学教室は市内の児童生徒の自然科学的探究心を育成する目的で開催されているが、今年度の参加者は402名、同伴父兄を含めると466名に達した。しかし年々開発が進み野外観察会に適した場所を探すことに困難が感じられることも、また事実である。

〈主事 大谷津隆房〉

Hakodate City Museum News

SARANIP—サラニップ—No.18 1979.3.31発行

編集・発行 市立函館博物館 (TEL0138-23-5480)

北海道函館市青柳町・函館公園内 (〒040)